岐阜市政記者クラブ同時配布資料
岐阜県政記者クラブ加盟社　各位

令和６年１１月２２日（金）　岐阜県発表資料			
担当課	担当係	担当者	電話番号
文化財保護センター	調査第三係	長谷川・秋松	電話　058-237-8550 FAX　058-237-8551

「芥見町屋（あくたみまちや）遺跡発掘調査見学会」を開催します

岐阜県文化財保護センターでは、遺跡や遺物の見学をとおした、埋蔵文化財に対する理解の深化と、文化財保護思想の普及を目的に、芥見町屋遺跡発掘調査現場を公開し、その調査成果を報告します。

１　日　　時　　令和６年１１月３０日（土）　１３：３０～１５：３０（雨天中止）
※中止の場合のみ当日８：３０までに当センターホームページの新着情報（https://www.pref.gifu.lg.jp/soshiki/21807/、二次元コード参照）でお知らせします。

２　場　　所　　岐阜市祇園地内　芥見町屋遺跡発掘調査現場（会場案内地図参照）
※会場の駐車場に限りがあるため、できる限り公共交通機関を御利用下さい（最寄りのバス停：岐阜バス「長山」、会場まで徒歩約２０分）。お車で御来場の方は、集合場所周辺駐車場（約３５台）又は会場から約３００ｍ西にある駐車場（約２０台）をご利用ください。

３　参　加　費　　無料（事前申込み不要）

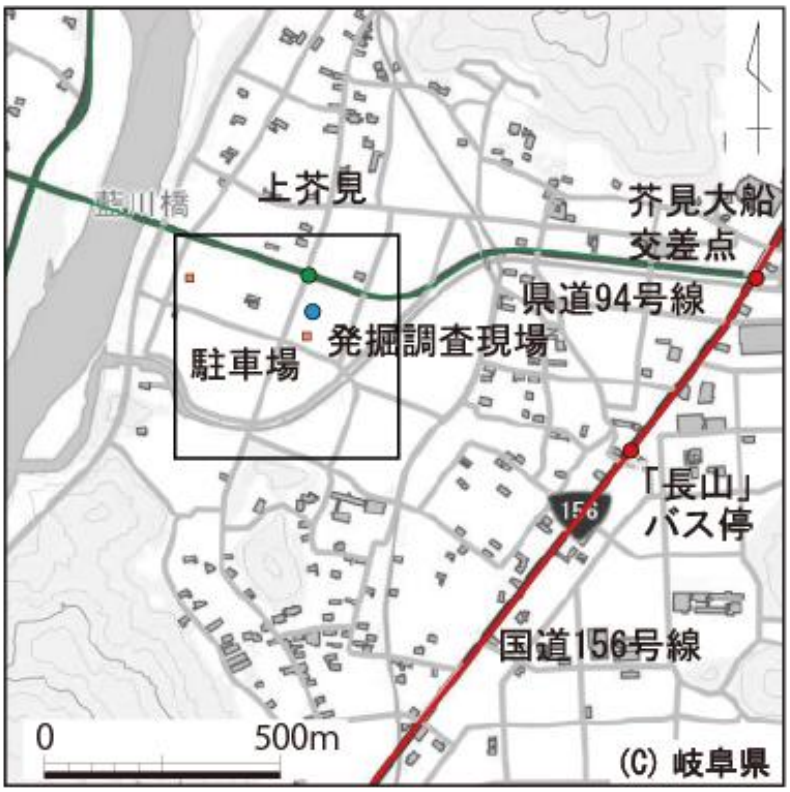
４　服　装　等　　現場は土がむき出しであり、靴等が汚れる可能性があるので御注意ください。また、屋外であるため、防寒対策をしてください。

５　当日の連絡先　　岐阜県文化財保護センター芥見町屋遺跡監督員事務所
ＴＥＬ　０８０‐８７０２‐０８５３（担当：秋松）

当日は発掘調査した現場の一部を公開するとともに、発掘担当者による調査成果の概要説明を実施します。また、調査で出土した出土品を厳選して公開します。

６　会場案内地図

会場周辺図



会場拡大図

※駐車場は台数に限りがあります。できる限り乗り合わせの上、御来場いただきますようお願いします。

【アクセス】　　国道 156 号から　　「芥見大船」交差点を西へ、上芥見交差点を南へ
　　県道 94 号から　　藍川橋を東へ、上芥見交差点を南へ

７　芥見町屋遺跡発掘調査成果の概要（１０月末現在）

（１）遺跡の位置と地形

芥見町屋遺跡（岐阜市）は、長良川左岸の自然堤防上に立地する遺跡です。令和３年度に着手した国道１５６号岐阜東バイパス建設事業に伴う発掘調査によって、弥生時代後期から古代にかけて集落跡や、近世の郡上街道跡などを確認し、土器などの遺物が約４０万点出土しました。また、今年度からは、県道工事に伴う発掘調査も開始しました。

（２）今年度の発掘調査

所在地：岐阜市祇園地内

発掘調査面積：国事業　４，７２８．４㎡（累計１５，１０２．３㎡）

　　県事業　２，４４０．２㎡

現地調査期間：令和６年５月～令和７年１月上旬（予定）

調査原因（事業者）：国道１５６号岐阜東バイパス建設事業（国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所）

　　：公共道路メンテナンス事業（主）川島三輪線藍川橋工区（岐阜県岐阜土木事務所）

調査主体：岐阜県文化財保護センター

（３）見学会の見どころ

①全国的にも珍しい「刻書円面硯（こくしょえんめんけん）」（写真１）

今回展示する「刻書円面硯」は令和５年度に出土しました。「円面硯」は、古代の硯（すずり）の一種で、石製ではなく、「須恵器（すえき）」（※１）という当時の焼物です（陶硯（とうけん））。芥見町屋遺跡の東方の丘陵地には、古代の各務郡（かがみぐん）に属する一大窯業地であった美濃須衛（みのすえ）古窯跡群があり、刻書円面硯も８世紀頃に美濃須衛窯で生産されたと考えられます。刻書（刻んで書いた文字）は、「海（うみ）」（墨汁を溜める部分）の外面に刻まれていました。破片は２つあり、それぞれ「千年百年」、「大平大楽」など１２文字程度が刻まれており、それぞれの前後関係は現時点で不明ですが、漢文で、縁起の良い文章が刻まれていると考えられます。須恵器にこれほど多くの文字が刻まれた事例は、全国的に見ても少なく、非常に貴重な資料です。

②古代の土器焼成坑（どきしょうせいこう）群の発見（写真２）

須恵器は、山の斜面に築いた地下式の窯で焼かれましたが、須恵器より焼成温度が低い土師器（はじき）（※２）は、平地を掘りくぼめた直径約２ｍ程度の浅い穴の中で焼かれました（野焼き）。当遺跡の調査では、この土師器を焼成した「土器焼成坑」を累計９基確認しました。同遺構がこれほど集中して築かれた事例は、県内において他にありません。こうした遺構が当地に営まれた背景には、土師器の生産と直結した長良川の水運が背景にあった可能性があります。写真の遺構は、土器焼成坑の周囲に不良品を廃棄した状態を示していると考えられます。見学会では、実際に出土した土師器を展示します。

③累計２４６軒の竪穴建物（たてあなたてもの）群（写真３）

今回の調査で１３５軒の竪穴建物を確認し、４年間の調査の累計で２４６軒となりました。当遺跡の竪穴建物は、平面形が一辺４～５ｍ程度の方形のものが多く、床面中央に炉跡がある弥生時代後期から古墳時代初め、壁際にカマドを備える飛鳥時代から平安時代の大きく２時期に分けられます。両者はほぼ同じ場所で重なって見つかっており、前者は古い河道や谷に挟まれた微高地、後者は場所を変えながら断続的に営まれていたことがわかりました。見学会では、竪穴建物の痕跡や実際に出土した土器を展示します。

◎近藤（こんどう）　大典（だいすけ）（岐阜県博物館学芸員）による刻書円面硯に関するコメント

出土した２つの円面硯には、それぞれ「□□〔者ヵ〕千年百年」、「歳大平大楽有」という文字が読み取れる。破片が出土しているため前後関係が不明であるが、漢文で書かれた吉祥の意味合いの文章であると考えられる。刻書が施される須恵器の事例は少なく、中でもこうした文章が施される事例は珍しく注目される。

◎宇野（うの）　隆夫（たかお）氏（帝塚山大学客員教授）による調査成果に関するコメント

芥見町屋遺跡は長良川と山田川に囲まれた自然堤防上に立地する遺跡であり、地理的環境から水陸の交通の要所であったことが推察される。こうした地理的要因を背景に、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて多くの建物群が計画的に配置される集落が生まれた。今年度の調査では、その範囲がほぼ特定された点が特に評価できる。古墳時代の集落としては規模が大きく密集した建物配置であることから、古墳時代開始期の社会・軍事的緊張を背景として成立した集落であったであろう。

飛鳥時代から奈良時代にかけて、この地に再び集落が出現するが、珍しい須恵器類や土器焼成坑などが少なからずあり、一般集落とは考えられない。今回確認した集落の中には、郷レベルの有力者が活躍したであろう物資集散拠点がある一方、長良川に近接した地点において官衙（かんが）（※３）が存在したことをうかがわせる方形の大型柱穴跡などが見つかっている。この時期の集落は、当時の国家的な産業・物流の整備と関わって成立したものと推定しておきたい。

平安時代、特に９世紀末以後には、地域の有力者が新規開拓して成立したとみられる集落が展開していき、それまでとは異なって人々の営みが近代にまで連綿と続いた。中世には、長良川沿いなどに集落が移動し、現代の景観に近い状況になったと考える。

長良川と、それに沿うように形成された平地という交通に絶好な場所をめぐり、様々な社会的・政治的・経済的背景による人の居住・物の生産と、両者の絶え間のない往来を発掘調査から通時代的に明らかにしたという点で、今回の調査においても多くの重要な発見があったと評価したい。

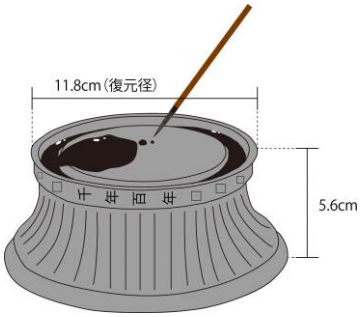
※１　須恵器…古墳時代中頃に朝鮮半島から伝わった青灰色をした硬い土器
※２　土師器…古墳時代以降に作られた素焼きの土器の総称
※３　官　衙…古代の役所、官庁の総称

（４）関係写真

①刻書円面硯（写真１）※左が実物、右が拓影

「□□〔者カ〕千年百年」

「歳大平大楽有」



刻書円面硯復元イラスト

【破片の大きさ】

上：幅 4.8cm、高さ 3.9cm

下：幅 6.6cm、高さ 5.6cm

②土器焼成坑（写真２）

土器焼成坑とそれに伴う廃棄場

③竪穴建物群（写真３）

弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴建物群